

---

# 悲しいけどプレゼント

黒昭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悲しいけどプレゼント

### 【Nコード】

N1549D

### 【作者名】

黒昭

### 【あらすじ】

お父さんが死んだ。大好きなお父さんがいなくなってしまった。だけど、悲しめない自分がいた。

(前書き)

い。文才がないため、不快感を感じるかもしれませんが、ご容赦ください。

お父さんが死んでしまった。

かなり前から癌にかかり、彼の長い闘病生活を比較的近くで見続けていたので、多少の覚悟はあった。

いつか、お父さんはいなくなる、と。

僕は泣いてしまうだろうか、僕は耐えられるだろうか、僕は……それ以上のことはわからなかった、考えられなかった。

そして、その日は来てしまった。あっさりと、唐突に。

朝方、お父さんの仕事仲間の人から連絡があり、父親のいる病院へと向かった。

お父さんは、もう、何も考えられなくなって、生きていうより、生かされているというほうが正しいのではないかと思えた。もうその体には、生きる機能があるとはいえなかった。

医師には、もうすでに脳死状態なのだと言われた。つまり、機械に頼り、体は申し訳程度に動かされているというわけだ。

お父さんは、親戚、同僚が集まったところを見計らって、死なされた。

何人かは泣いていた、何人かはうつむいていた、みんな悲しんでいた。

僕は、何も感じてはいなかった。脳が機能を停止したかのようだった。

た。

僕は周りに気を配り、うつむき、こぶしを強く握り締めた。だんだんと、悲しまない僕に腹が立ってきて、握ったこぶしが壊れるくらい強く、強く握った。

後から、ある人が言った。「お前はお父さんの手を握りつぶさないように、我慢していたんだよな！」

なぜか無性に腹が立ち、その場を去って言ったのを覚えている。

みんなは言った、お前は本当にお父さんのことを悲しんでいると。悔しかった。

お父さんのことは、大好きだった。

子どものような人で、一緒にいると、楽しかった。僕のチンケな悩みに、まっすぐに答えてくれた。

僕は、家族の中で誰を一番信用していたかというと、多分、お父さんじゃないかな。

なのに、それなのに、僕は涙を流せなかった。悲しみが溢れてこなかった。

僕は、僕に失望した。

葬式の最中、山積者は、予想を上回るほどの人数で、席が足りずに困った。

「これだけの人を寄せ付けるお前のお父さんは、すごい人だったんだぞ。」祖父は言った。

「お父さんを超える人間になるんだぞ。」いろんな人が言った。僕は、ただうっとうしく感じた。

お父さん、悲しめなくてごめんね、泣けなくてごめんね。

僕はお父さんのことを好きだったはずなんだ。でも、何も感じられ

なかったんだ。

お父さん、もしかしたら僕は、誰のことも好きになれてないのかもしれない。

……、それはそれで悲しいんだろうな。

何日か経って、僕の誕生日になった。

家族から祝福された、のに、なんだか物寂しかった。

何で川からないけれど、何か足りない気がした。

その日、布団にもぐってからやっと気づいた。

「お父さんが、いなかったな。」

僕はその日、涙を流して泣いた。みんな気づかれないように、声を殺して泣いた。

今まで味わったことのない悲しみが押し寄せてくるのを感じた。

悲しくて、悲しくて、もう何も考えられなくなるんじゃないかというくらい泣いた。

それはお父さんからのプレゼントだった。

「やっと泣けたよ……、ごめんね、ありがとう。僕は人を愛せるんだって、わかったよ。」

届かないとはわかっていても、悲しみの跡からあふれる感謝の気持ちが始まらなかった。

止めるつもりもなかった。

なんどもなんどもつぶやいた。あの穂にいえなかった、一番いい言葉。

ありがとう

翌日、僕は寝坊して、学校に遅刻した。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1549d/>

---

悲しいけどプレゼント

2010年10月13日03時36分発行